

令和4年度

# 事務所だより 第5号

令和5年1月25日

益田教育事務所

つながる・つなげる～学校教育目標の実現に向けて～



ひとつにつながり「守り」から「攻め」へ

所長 豊田 邦昭

昨年末はサッカーWカップで世界中が盛り上がり、私も日本戦はつい夜更かしをしたり、早起きをしたりして日本チームの活躍に見入ってしまいました。その中でも、スーツ姿の森保監督が試合後の円陣の中で選手に熱く語りかける姿、そして敗戦後に選手をハグし、耳元で何かをささやく姿が今も私の心に強く焼き付き、「監督として、一体どんな言葉を選手たちに語りかけているのだろう」ということがとても気になりました。

若手からベテランまで、個性の強い選手たちの心を掴み、チームとして最大限に力を発揮させる森保監督の「マネジメント」を知る手がかりとして、大会後に放送された日本代表チーム専属シェフ「西 芳照さん」とのエピソードがありました。それは、試合に勝って、食事会場に戻ってきた森保監督が「西さん勝ったよ！」と声をかけ、西さんが「おめでとうございます。」と応えたところ、「西さん、おめでとうじゃないだろう。やったねとか…（一緒に戦っている）仲間だろ。」と、いつもは温厚な森保監督が初めて怒ったのだそうです。森保監督の「選手もスタッフも全員がともに戦う『仲間』だ」という強い信念、一貫した姿勢が感じられ、全員が同じ目標に向けて、自分自身のミッションを理解し、心をひとつにして戦っていることがひしひしと伝わってきました。

また強豪国との対戦において、前半は防戦一方だった日本チームが、ハーフタイムを経て、後半は別チームを見ているかのように「攻め」に転じ、見事な逆転勝利を収めました。これは森保監督が戦況を俯瞰的に見ることでのタイムリーな選手起用、そして的確な指示により、チーム全員がそのベクトルにピタッと心を合わせることで成し得た勝利であり、私は決して「ドーハの奇跡」ではないと思っています。

Wカップが終わり、私の脳裏に11月に行った学校訪問の際に聞いた、ある管理職の言葉が蘇ります。

「(学校が落ち着いている) 今からが『攻め』時だと思っています。」  
という言葉です。

現在、学校を取り巻く環境は、コロナ感染症や教職員の欠員等により、何とかこれ以上、児童・生徒にとってマイナスの影響が出ないように持ち堪えるのがやっとという「守り」の時期だと思います。

いよいよ今年度も残すところ2か月余りとなりました。各校では、管理職を中心に学校教育目標の実現に向けて、改めて学校評価などを元に振り返りを行い、戦術を練り直しておられることと思います。ぜひとも森保ジャパンが見せてくれた後半の「攻め」の姿勢で、教職員のベクトルをそろえ、学級作り、学校作りの総まとめをお願いします。修了式の日、子どもたちと全教職員が「このチーム(学級・学校)で良かった!」、「ブラボー!」と笑顔でハイタッチを交わせるような春が来ることを期待しています。





### 『結集！しまねの子育て協働プロジェクト』～益田管内の取組紹介～

社会教育スタッフ 社会教育主事兼企画幹 澤江 健

みなさんは子どもの頃に体験した出来事で、どんなことが記憶に残っていますか。私の記憶に残っていることは、①小学生の頃、子ども会主催のキャンプを海でしたこと②中学生の頃、地区民運動会の種目「大縄跳び」に参加するため、地域の大人と子どもで夕方集まって練習したことです。今でもその時の情景や大人とやりとりしたことなどが目に浮かんできます。



さて、島根県では平成24年度から『結集！しまねの子育て協働プロジェクト』で、子どもたちの健やかな成長や地域の活性化、地域の実態に応じた仕組みづくりや取組を推進してきました。これまで多くの成果があがっていますが、その一つに子どもの学びや体験活動が充実してきたことが挙げられます。

子どもの体験活動については、国立青少年教育振興機構が発行している冊子「子どもの成長を支える20の体験」に、多様な体験を土台とした子どもの成長を支える環境をつくることの大切さが、以下のように書かれています。

子どもの成長を支える環境では、親や先生、近所の人といった大人とのかかわりも重要な要素の一つになります。そのため、子どものまわりにいる大人は、子どもたちに体験の場や機会を提供するだけでなく、温かく見守りつつも、様々な体験を通じて子どもたちを褒めたり、励ましたり、悩みを聞いたり、時には叱ったりしながらうまく関わり合いをもつようにし、心の成長を促す働きかけを積極的に行っていくことも必要になります。（一部抜粋）

益田管内において、これまでも地域の大人によって、子どもたちが様々な体験をす

「国立青少年教育振興機構HP「子どもの成長を支える20の体験」で検索

ることができる活動づくりが行われてきました。最近では大人が考えた活動を体験するだけではなく、子ども自らが企画をしたり、大人を巻き込んで地域活動をしたりすることも増えてきています。子どもたちの主体性を引き出すような大人の関わり方が増えていることも、活動の広がりにつながっている理由の一つだと考えられます。一方で、「子どもたちのために」という思いで始まった活動であっても、気がつくに関わった大人同士のつながりが深まったり、大人が活力をもらったりしていることもあります。子どもの学びや体験活動が充実することは同時に、大人にとっても自分や地域を見つめ直すきっかけとなっているのです。

今号では、益田管内で行われている「結集！しまねの子育て協働プロジェクト」の様子を、各市町の派遣社会教育主事がお伝えします。文中の太字キーワードにも着目しながらご覧ください。



## 対話の場の広がり

益田市教育委員会 派遣社会教育主事 桐 雅幸

益田市では、ひとづくりを市の政策の中心に据えた取組を行っており、特に「**ライフキャリア教育**」に力を入れています。この「ライフキャリア教育」とは、様々な立場の人たちとの「**対話**」を通して、多様な価値観や考え方、生き方にふれ、自分自身の生き方について考えるプログラムのことです。これまで、主に「**益田版カタリ場**」（小・中・高のそれぞれで実施）や「**新・職場体験**」（市内全中学校で実施）が主なライフキャリア教育・対話の場でした。しかし近年、これ以外にも対話の場をつくる学校が増えています。以下の表にそれぞれの活動をまとめています。

学校名・活動名	教科・領域等	関わる人・事業所
益田市立高津中学校 ★イキカタツカン（1年）	総合的な学習の時間	Iターンをしてきた若者 県土整備事務所・ぶどう農家 小野沢シネマ・津和野の方々
益田市立益田東中学校 ★東中ミーティング+（生徒会） ★6かるトーク（2年）	生徒会活動 総合的な学習の時間	ブドウ農家・医療従事者 大阪教育大学の学生 公民館職員など
益田市立小野中学校 ★タイムカプセルカタリバ（3年）	総合的な学習の時間	卒業生
益田市立匹見小中学校 ★大学生としゃべっていいとも（全学年）	休憩時間での活動	益田版カタリ場で出会った大学生など
島根県立益田翔陽高等学校 ★ぶっちゃけ！ミライトーク（2年）	放課後での活動	翔陽高校卒業生 農業部の方々

例えば、高津中1年生は総合的な学習の時間に様々な人との対話に重点をおいた学習をしています。また、益田東中は地域活動で学んだことを言語化し、振り返るために対話の場を設定しています。この他にも学校を超えて高校生同士が対話したり、オンラインで大学生と対話したり、多様な活動が生まれています。このように、各学校が独自に対話を中心とした活動を取り入れ、益田市が取り組む「ライフキャリア教育」に「**つなげる・つながる**」といった意識をもって取り組んでいます。先生方からは、「対話の場を継続していくことで、子どもたちのコミュニケーション能力が向上している」といった声を聞くこともありました。さらに、多様な人との関わりが増えることで、子どもたちの出会う価値観や考え方も増えていき、それぞれの生き方の選択肢も広がっていると思います。

この教育活動に参加する大人や事業所の方々にとっても単なる学校支援ではなく、自分自身を振り返る機会となったり、コミュニケーション能力を向上させたりできるため、職員研修として参加される事業所もあります。また、事業所の魅力を伝えることのできるリクルートの場として活用しているところもあり、大人や事業所にとっても満足感の高い活動になっています。

今後もライフキャリア教育を進め、多様な人が子どもたちとつながるための取組を推進していきたいと思っています。



高津中学校  
「イキカタツカン」の様子

## 地域でつくる子どもの成長と学びの場『アルモンデ食堂』

津和野町教育委員会 派遣社会教育主事 水上 真悟

津和野町には、地域で**子どもの成長と学びを支える場**として、地域食堂『アルモンデ食堂』があります。名前の由来は、調理で使う食材は、持ち寄ったものや地域から譲ってもらったものを使うので「有るものを使った食堂」というところから、「あるもので」→「あるもんで」→「アルモンデ」となっています。

今年度から本格的に始動したこのアルモンデ食堂は「子どもたちに共食の機会や多世代の温かなつながりを提供したい。」

「子どもたちの居場所を確保し、食を通じた体験から様々な学びの提供をしていきたい。」「食堂を通して参加者が様々な機関とつながるきっかけになるような、食堂以外のいろいろな機能をもたせていきたい。(例：相談できる窓口、高齢者の孤立防止、子どもの教育支援、親同士のつながり、等)」という熱い思いをもった地域住民によって運営されています。

基本的にひと月に2回（土曜日と月曜日）開催されており、幼児から80代の方まで毎回様々な世代の方が参加しています。午前中は参加者が持ち寄ったり、地域の方が提供して下さったりした食材を見て、みんなで話し合いメニューを決めて調理を行います。

その後昼食をはさんで午後からは「学びの時間」として様々な活動をしています。様々な人の手によってつくられている場だからこそ、多様な人との関わりが生まれ、それぞれの相互作用によって**心地よい関係**が生まれているのだと思います。小学生（子ども）の視点で例をあげると以下のようになります。

『午前の昼食づくり』



『午後の学びの時間（味噌づくり）』



幼 児×小学生→頼り頼られる関係から小学生は自己有用感を感じることができる。  
子ども×年配者→年配の方にとってここに来る子どもたちは「そこにいるだけで愛おしい」存在であり全面的に愛を注いでくれるので、子どもたちの自尊心を高めている。  
高校生×小学生→地域の中で活動し、一緒に遊んでくれる高校生の姿は小学生にとって、よきロールモデルとなっている。

この活動は、子どもたちに**食を通じた学びの機会**と**共食の機会**、**多世代の温かなつながり**や**多様な価値観**を得る時間と空間を創出しています。また、子どもの成長や学びを地域で支えることを通して、大人たちの**緩やかなつながり**が生まれ、人や活動の輪を広げています。

津和野町では「**まち全体が学び場**」を合言葉に様々な活動を行っていますが、アルモンデ食堂のような**子どもも大人も学び成長できる場**が、今後も増えていくような働きかけをしていきたいと思っています。

## 子どもたちに豊かな放課後を！～放課後サクラマス教室の取組～

吉賀町教育委員会 派遣社会教育主事 中村 浩志

吉賀町では、島根県が推進している「結集！しまねの子育て協働プロジェクト事業」の放課後支援（放課後子ども教室）を、町が進めている教育の核“**サクラマスプロジェクト**”になぞらえ、「放課後サクラマス教室」と銘打って、毎月1回程度小学生を対象に取り組んできました。これまでに、蔵木地区・朝倉地区・柿木地区で開設し、実践してきましたが、今年度から六日市地区・七日市地区でも開設し、全小学校区にて実施する体制が整いました。



～巨大カルタあそび



～夏の川遊び～



～はりがねアート教室～

### 蔵木放課後サクラマス教室 (蔵木子ども読書会)

“読書活動”にスポットを当て、その季節や季節行事などに沿った本を読むことと合わせ、体験活動を行っている。毎月第2土曜日の開催。

### 柿木放課後サクラマス教室 (プレーパークかきのき)

“柿木地区にある山や川、四季折々の豊かな自然の中で、思い切り体を動かして遊ぶ”ことをコンセプトに毎月第4月曜日に開催。

### 朝倉放課後サクラマス教室

民生児童委員を中心としたメンバーで運営。“地域のひと・もの・ことを生かしながら、子どもたちと体験する”メニューを実施している。毎月第3月曜日に開催。



～竹水鉄砲づくり～

### 七日市放課後サクラマス教室 new



～ニュースポーツ体験～

### 六日市放課後サクラマス教室 new

普段、学校や家庭では体験できない**ダイナミックなプログラム**に、子どもたちが目を輝かせるのはもちろんですが、「子どもたちに**元気**をもらえた。」「地域住民同士の**つながり**が広がった。」と地域の皆さんも毎回とても楽しみにしておられ、子どもたちと関わることに**やりがい**を感じる人も増えています。

また、最近では、自治会の有志グループが参画したり、吉賀高校の生徒が総合的な探求の時間（**アントレプレナーシップ教育**）の中でサクラマス教室の活動を企画したりするなど、これまでになかった新たなネットワークも広がっています。

「地域ぐるみで子育てを！」を合言葉に、この放課後サクラマス教室では、学校・公民館・放課後児童クラブ・地域住民など、多様な大人が**対話**を通して連携・協働しながら、子どもたちの放課後を支えています。サクラマスプロジェクトの目標である“**ふるさとでの学びや体験をもとに、いつの日かふるさと吉賀町を支える人材(財)の育成**”が具現化できるように、関係者一丸となって取組を推進していきたいと思ひます。





「先生、修学旅行の話し合い、今度はいつ？」と聞いてきた生徒は、前の学校で集団にうまく入れず、トラブルが続き、結局3ヵ月ほど学校を休んだ後、校区外就学で転入して来た生徒です。「うちの学校を選んでくれたからにはできる限りのことをしよう」とみんなで確認して受け入れました。

その生徒は、少し学校になじみ始めた頃、夜の地域スポーツの練習に参加することにしました。ある日、練習時用の飲料水を持って来て、朝担任に預けていたものを放課後返してもらい、ちょっと飲んでいたので見つけた先生が、担任に「(他の生徒には許可していないのだから) だめっ!と言ったんですけど(何とか言って下さい!)。」と報告に来ました。担任は「先生、飲料水まで準備して来て頑張ってるよ!ってところを(先生に)見て欲しいんですよ。」と返答していました。

学んで成長しているのは、職員も同じです。「できる限りのことをして受け入れる」ということは、こんな風に「なぜこの生徒はこんな行動をするのだろう…。」と考えるということだと思ふのです。当時計画中の修学旅行での守口三中夜間学級との交流で、この生徒たちはどんな出会いをし、どんな風が変わっていくのか、とても楽しみに became 覚えています。(M)

